



Title	留学生向け日本語授業の日本人学生への応用 : 一般日本語演習「レポートゼミ」での実践
Author(s)	小林, 由子
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 15, 67-74
Issue Date	2007-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.15.67
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33020
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1506.pdf



留学生向け日本語授業の日本人学生への応用

—一般日本語演習「レポートゼミ」での実践—

小林 由子*

北海道大学留学生センター, 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

The Application of Japanese Classes for Foreign Students to Japanese Students on 'Report Writing' in the Freshman Seminar

Yoshiko Kobayashi**

International Student Center, Hokkaido University

Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies, Hokkaido University

Abstract — Japanese students need to learn how to write papers. This is an especially serious problem for students in the first year. But current measures are not sufficient and discussion about how to support the students is needed. This paper aims to report the application of Japanese lessons for foreign students to Japanese students in the freshman seminar and examine the validity of the application. In the 'Report Writing' class, Japanese students need knowledge and skill to write objective papers in the appropriate style in the same way as foreign students. The teaching method for foreign students is also effective for Japanese students but how to construct a 'logical text' is still a problem that needs to be solved.

(Revised on 23 April, 2007)

1. はじめに

大学に入学した学生が直面する問題のひとつに、「論文を書く」ことがある。本稿で報告する実践は、「大学生と留学生のためのレポートの書き方入門」と銘打った大学1年生を対象として開講された一般教育演習（初年次向けゼミ）である。開講初年度である2005年の初回オリエンテーションでは、定員23名に対して112名の志望者が集まった。口頭で尋ね

たところ、志望の動機は、「高校ではレポートの書き方を習ったことがない」「書き方が分からないので不安である」というものが多かった。

日本語でレポートや論文を書かなければならない留学生に対しては、レポート・論文の書き方についての実践・教材が既に存在している（浜田・平尾・由井1997, 二通・佐藤2000, 門倉・筒井・三宅2006など）。これらの実践は、日本人学生のためにも有効であると考えられるが、日本語を母語としな

*) 連絡先: 060-0808 札幌市北区北8条西8丁目 北海道大学留学生センター (e-mail: koba@isc.hokudai.ac.jp)

**) Correspondence: International Student Center, Hokkaido University, North 8 west 8, Kita-ku, Sapporo, 060-0808, Japan

い留学生と日本語を母語とする日本人学生では、異なる対処をしなければならない部分もあるだろう。

留学生に対する日本語教育と日本人学生に対する日本語教育は、お互いに共通する部分と異なる部分を持ち、相互に貢献しうる可能性を持つ。しかしながら、どのような相互貢献が可能かについては、あまり研究されていない。

そこで、本稿では、留学生のために設計された教材・授業をもとに日本人学生に対して「レポートの書き方」ゼミを行った実践について報告する。そして、「レポート・論文作成」に関して、留学生に対する日本語教育が日本人に対する日本語教育に対してどのように貢献できるかを検討し、その留意点と課題について述べる。

2. 実践の概要

本稿で報告する実践は、北海道大学で筆者が開講した1年生を対象とした一般教育演習「日本人学生と留学生のためのレポートの書き方入門」である。受講者は23名で、志望者112名から抽選で決定された。専門の内訳は、法学部1名、理学部2名、医学部（医学科）1名、医学部（保健学科）10名、歯学部1名、工学部6名、農学部1名、水産学部1名と、理系が大勢を占める。なお、23名中3名が留学生であった。

本稿で報告する授業の実施期間は、2005年4月から7月までの15週間である。授業は1回90分で、1週間に1回、計15回開講された。

3. 受講者のニーズ

受講者が決定した段階で、授業に先立ち、簡単なニーズ調査を行った。

受講者23名のうち、「レポート・論文を書いた経験」については、「ある」と答えた者が11名、「ない」と答えた者が12名だった。「レポート・論文の書き方を習ったことがあるか」という問いについては、8名が「ある」、15名が「ない」と答えた。

また、「自分のレポートを書くことの問題点」について尋ねたところ、以下のような回答が得られた

(複数回答)。回答した人数と代表的な回答を示す。

【留学生から出た問題】3名

- ・自分の言いたいことを日本語に翻訳できない
- ・分からない言葉があっても辞書にない
- ・書き方が全然わからない

【レポートがどのような文章か】3名

- ・レポートが何かわからない
- ・レポートと感想文の区別

【言葉の使い方に関する問題】4名

- ・どのような言葉を使うかわからない
- ・接続詞の使い方
- ・きちんとした文章が苦手

【構成に関する問題】8名

- ・どのように組み立てていいかわからない
- ・構成がうまくできない
- ・何をどのような順番で書いていいかわからない
- ・論理がばらばらだと言われる
- ・レポートの構成のしかたを学びたい
- ・文章の流れがうまくできない

【内容・読み手への伝え方に関する問題】13名

- ・何を書いたらいいかわからない
- ・何から書いていいかわからない
- ・内容が重複する
- ・文章が簡潔にまとまらない
- ・文章が表面的で内容が浅くなってしまう
- ・自分の主張したいことがまとまらない
- ・長い文章がだらだらしてまとまらない
- ・自分以外の人にわかりやすく伝わっているかどうか

【全体的な問題】2名

- ・言葉が出てこない
- ・書き方がわからない

上記の結果を見ると、レポートや論文を書いたことがない者が全体の約半分、レポートや論文の書き方を習ったことがない者が約3分の2いる。また、学生自身が問題として認識していることは多岐にわ

たるが、「レポート的なスタイル」「構成」「内容」「まとめ方」に関するものが多く、特に「内容・まとめ方」に関するものが多いと言える。

4. シラバス

授業の内容・シラバス・方法は、筆者が留学生に対して行っているものを採用し、途中で受講者の意見を聞き、変更を加えた。本節では、その背景と概要について述べる。

4.1 留学生に対するレポート指導の先行事例

留学生に対するレポート・論文指導の代表的な市販教材としては、浜田・平尾・由井（1997）や二通・佐藤（2000）がある。

浜田・平尾・由井（1997）は、「基礎編」「論文編」「資料編」の三部に分かれている。「基礎編」では「よく使われる文の形」「引用」「句読点」「表記規則」が、「論文編」では「論文ってどんなもの」という論文の基本的な構成を示す章から始まり、「序論」「本論」「結び」という論文の構成に沿って、どのような内容をどのように書くべきかが示される。さらに、「資料編」では、「場面別の表現」「展開の技術」「卒業論文・学術論文のために（論文の付属要素）」という形で、レポート・論文によく使われる表現や、要旨・キーワード、目次・注・参考文献など論文の付属要素が扱われている。

一方、二通・佐藤（2000）は、まず、「文章表現演習の前に」という章を設け、「文体」「自動詞・受け身」「『は』『が』の使い分け」「語や文の名詞化」「首尾一貫した文」「句読点の打ち方」「各種記号の使い方」「引用の仕方」について演習を行った後、「大学生のための文章表現」という章で、「段落」「仕組みの説明」「歴史的な経過の説明」「分類」「定義」「要約」「比較・対照」「因果関係」「論説文」「資料の利用」「レポートの作成」のように、段落展開を中心とした構成をとっている。

上述した2つの教材は、ともに留学生のためのレポート・論文の書き方のためのものであるが、そのアプローチは異なっているといえる。

4.2 筆者による留学生に対する授業シラバス

筆者は、上記のような先行する教材を参照しつつ、留学生センターの「一般日本語コース」において、独自に開発した教材を用いて、留学生に対する「レポート・論文の書き方」の授業実践を行っている。

対象者は、研究留学生で、既に大学院に在籍し日本語または日本語以外の言語で論文やレポートを書いた経験がある者と、これから大学院に進学する研究生でまだ論文やレポートを書いた経験がない者が混在している。また、筆者が担当するクラスは、複数ある中上級者向けの文章表現クラスの上級レベルであり、受講者の中には、下のレベルでレポート・論文の書き方について学習した者もいるが、新たに渡日しプレースメントテストの結果配属された者も所属している。その中には書くための訓練を受けていないものも多い。

授業は、受講者の背景と下のレベルでの学習項目を鑑み、以下のようなシラバスで行った。なお、◎は、日本人学生を対象とした授業でも行った項目である。

- ◎ 論文の文体
- ◎ 正しい文を書く（首尾一貫した文）
- ◎ 接続詞
- ◎ レポートの構造
 - 序論・結論の書き方
 - 数値データを使った本論の書き方
- ◎ 引用データを使った本論の書き方
- ◎ 文献情報の書き方
 - 論説文の書き方
 - 研究計画

「因果関係」「比較・対照」などの段落展開に関しては、既に下のレベルで実施しているため、当該クラスでは行わず、上級レベルでも誤りを犯しやすい語法と、論文の構成を中心としたシラバスを採用した。実施に当たっては、「文章作成にあたって自意識化すべき事項」（小林 2000, 2001）に焦点を当てている。

4.3 日本人学生に対する授業シラバス

日本人学生を対象とした授業にあたっては、4.2で示した留学生向けのシラバスをもとに、あらかじめシラバスを作成した。しかし、毎回の授業で学生と話し合いを行い、必要と思われる項目を追加した。その結果、以下のようなシラバスで授業を行うこととなった。

よいレポートの条件

- ◎ 論文・レポートの文体
- ◎ 正しい文を書く
- ◎ 接続詞
- ◎ 引用の仕方
- ◎ 出典の示し方
 - 一段落の文章の書き方・一段落の構成
 - 要約の仕方
- ◎ レポートの構成
 - アウトラインを作る
 - 「序論」「本論」「結び」を結びつける
 - 「クロズド・クエスチョン」の文章
 - 「オープン・クエスチョン」の文章

4.4 シラバス・内容の異同点

4.2および4.3において◎で示した項目は、留学生・日本人学生に共通して行ったものである。また、4.3における◎のない項目は、日本人学生のための項目である。

留学生と日本人学生は背景を異にしている。すなわち、留学生の多くはすでに学部を終えており、既に研究テーマを持ち、日本語以外の論文を書く為の知識とスキルを有している。彼らが必要とするのは、すでに持っている論文の知識を日本語で使うためのスキルであることが多い。一方、日本人学生は、学部に入ったばかりで関心の方向性が定まっていないため、レポートで明らかにすべき「問い」を明確にするためのスキルを必要とする。

日本人学生に対する授業の途上で、上記の相違点が明らかになったため、特に授業の後半でシラバスを変更した。

5. 実施内容と受講者の反応

本節では、授業を行った結果として、項目別に授業の内容を概説し、その授業に対して日本人学生がどのように反応したかを、受講者が書いた課題と授業後に書いた「授業の感想」に基づいて述べ、検討する。

5.1 よいレポートの条件

授業の初めに、「よいレポートの条件は何か」について講義を行った。特に強調したのは、「問題提起または提示した目的と、その答えとしての結論を合わせること」および「結論を導くために十分な論拠を書くこと」である。

このトピックは第1回の授業で扱ったため、受講希望者112名に対して講義を行う形となった。「3学習者のニーズ」に示したように、受講が決定した23名については「レポートがどんな文章か」に言及した者は3名とそれほど多くはない。しかしながら、抽選にもれた受講希望者のものを含む授業後の感想では、「レポートがどんな文章か知らなかった」「感想文との区別がついていなかった」などの意見が多く寄せられた。また、「レポートと論文の違いがわからない」という質問もあった。

レポート作成を自ら行う場合には、「何ができないかならないか」という目標設定が不可欠である。1年生の1学期の時点では、「レポートがどのような文章か」を認識している学生はそれほど多くはなく、「何に留意してレポートを書くべきか」を明示化して示す必要がある。

5.2 論文・レポートの文体

この学習項目については、まず、特定の読者を対象とした「手紙」の文体から入り、文体・内容の観点から見た「よい手紙」「よくない手紙」を対比した。そして、「レポートの文」が不特定多数を対象にしており、待遇表現は用いないこと、たとえば「去年」のような書き手中心の書き方はしないこと、中立的客観的な記述をすべきであること、引用は必ず明記し、自分の意見とそうではないものを区別することを強調した。

このトピックの本来の意図は、おそらく知っているであろう「手紙」と対比させることによって、レ

ポートの文章の客観性・中立性を際立たせることにあった。しかし、手紙の書き方をよく知らない受講者が多く「手紙の書き方がわかってよかった」という感想が複数あり、本来の意図とは異なる結果となった。

また、「レポートの文体」についても、「だから」「～たり～たり」など、レポートでは用いられない話し言葉を用いる者が、授業の後半になっても相当数あった。

これらの結果から、文体については、高校レベルではあまりインプットがないと考えられ、将来社会人として活動することを考えあわせると、手紙などの待遇表現も含めた指導が必要であるといえる。

また、これは留学生にも共通する問題であるが、管見では「書き言葉」について適切な教科書はあまりない。教材および教育方法の開発が必要である。

5.3 正しい文を書く

このトピックにおいては、たとえば、「(人が) 研究方法を開発する」「研究方法が開発される」のような動詞の自他の問題や、「本稿の目的は～である」「本稿では～を目的とする」のように、レポートでよく使われる文型の主語と述語の結びつきを意識することを意図した。これらの項目は、留学生にとっては困難な学習項目のひとつである。

日本人学生については、短文での主述の結びつきは問題があまりなかった。しかし、文が長くなると間違いが見られ、「初めて文の構造を意識した」というコメントがあったことから、長文に埋め込んだ形で文の主述を意識化させる活動は有用であると思われる。

5.4 接続詞

接続詞に関しては「因果関係」「時系列」「累加」「並列」など機能別に接続詞を提示し、前後の文脈によって使い分けるといった活動を主とした。

日本人学生については、それほど問題はないのではないかという予測があったが、理系の学生が大半を占めたこともあってか、「そこで」と「したがって」など機能が似た接続詞の使い分け、「ただし」「むしろ」など使用頻度があまり多くない接続詞の用法に

については間違いが見られた。また、「この接続詞の用法を初めて知った」「もっとじっくり時間をかけてやってほしい」という、より多くの情報を求める声が多数あり、不要という意見はなかった。

接続詞は、理解しやすい文章を書くために不可欠な学習項目のひとつである。日本人学生にとっても学習が必要であろう。

5.5 引用・出典

引用・出典については、インターネットを含む文献を引用した場合には引用した旨を必ず明記すべきであることを強調し、引用には、文言を変えない「直接引用」と大意を示す「間接引用」があること、引用の形式、参考文献リストの書き方を中心に演習を行った。

引用を明記すべきであることを認識していた学生は多くはなかった。また、引用や出典のし方を知っている者はほとんどなかった。さらに、授業で学習した後も、引用や出典の表示を行わない例がかなり見られた。

学生が他の文献の引き写しでレポートを作成するという問題は過去にも多く指摘されているが、その理由として規則を知らないこともあると思われる。引用を明記すべきであるということや、その形式は、徹底的に習得させるべき項目のひとつである。

5.6 一段落の構成

このトピックにおいては、段落の文に、もっとも重要な意味を担う「中心文」、中心文を支える「支持文」、長い段落のまとめをする「まとめ文」、段落と段落の関係を示す「関係指示文」という種類があることを教示し、モデル文の分析や、説明文・授業の感想文を材料に一段落の文章を作成するという活動を行った。

その結果、受講者はおおむね、まとまりのある文章を書くことができたが、感想を見ると、「今まで構成を意識したことがなかった」「これであまり苦勞せずに書くことができる」というコメントが多く見られ、構成を意識化することが助けになることが伺えた。

5.7 要約

このトピックでは、前節の「一段落の文章」から続く形で、中心文の抽出、キーワードの抽出、決められた字数によって情報をコントロールすることによって、要約文を作成した。また、複数段落を持つ文章の段落を要約することによって長い説明文をまとめるという作業を、グループワークによって行った。

段階を踏んで行ったためか、これらの作業は順調に行われ、書かれた文章も比較的良好であった。ただし、「全体をまとめるのが、上手く書けているかどうか自信がない」というコメントもあり、自分を評価する基準をいかに作るかが課題となった。

5.8 アウトライン

要約の作業に続く形で、複数段落をもつ構造の明確な説明文を要約し、それらがどのような構造になっているかを分析するという作業を通じて、アウトラインの意識化を行った。強調したのは、「問い」と「答え」の結びつきと、その結びつきを支える論拠のつながりである。

事前に質問したところ、文章を書く前にアウトラインを作成するという習慣をもつ学生はほとんどなかった。そのため、グループワークで難航する部分もあったが、「最初から、どうまとめるかを考えて問題提起をしたほうが良いということがわかった」などの気づきも見られた。

5.9 「序論」「本論」「結び」を結びつける

「段落の構成」や「要約」「アウトライン」は、既にある文章を分析し必要な情報を抽出するという作業が主であったが、レポートを作成する場合には、自ら問を立て、それに答える形で文章を作成することが必要であるため、文章を読んで問を立て、結論となる答えを探し、論拠と結びつけるという作業をグループで行った。

しかし、この段階になると、個人差が大きく、「書き方がわかってきた」「他の授業でレポートが楽に書けるようになった」というコメントもある一方、「難しい」というコメントや、論理の飛躍がある文章も

見られ、適切な論拠を使ってまとめた文章を書くことの困難さが目につくようになった。

アウトラインを作ることは有効ではあるが、その実効性については個人差があり、その個人差にどう対処するかが課題として残った。

5.10 「クローズド・クエスション」の文章と「オープン・クエスション」の文章

「クローズド・クエスションの文章」とは、ここでは、「賛成か反対か」など「yes-no」で答えることができるような問題提起をもった文章を指す。また、「オープン・クエスション」は、二者択一ではなく、より自由な形で提言などを行うタイプの文章である。

まとめた文章を書く場合の問題点の一つとして「問い」の立て方があり、曖昧である、結論を出すのが難しすぎるなど、答えを導きにくい問いを立てる者が見られた。そこで、その解決策として、「問いをどう立てるか」を中心とした項目を設け、資料を見ながらグループで討議して問いを立て、結論と論拠を考えた後、まとめた文章を書くという活動を行った。

「レポートの膨らませ方がわかってきた」という好意的なコメントも複数あったが、一方で、グループの一部の者のみ発言力が強い、またグループの中に意見交換が不得手な者が多く議論が進まないなど、構成メンバーの関係によって、書かれた文章の質が左右されるという現象も見られた。

グループワークは、一人で考えるのとは異なり複数の観点から考えることができるため、「3. 学習者のニーズ」で挙げる者が多かった「内容・読み手への伝え方の問題」を解決するためには有効な手段であるが、効果的に行うための方策は今後も検討する必要がある。

また、「立てる問いの適切さ」「適切な論拠」についての内的な評価基準を確立させるための方策についても、検討の余地がある。

6. 考察

以上、実施内容について述べた。この結果から示

唆されることとして、以下の事柄が挙げられる。

6.1 外国人留学生向けの内容の日本人学生への応用

「4. シラバス」で述べたように、「文体」「正しい文を書く」「接続詞」などの基本的な語法や「引用」「出典」「一段落の構成」については、留学生に使用したものを、ほぼそのままの形で日本人学生にも適用した。また、日本人学生に対しては、特に「問いの立て方」と「問いと結論を結びつける」ことを強調した。

当初の予想では、日本語母語話者である日本人学生には容易すぎるのではという危惧もあったが、実際には、日本語母語話者であっても知らない事項、意識したことがない事項が多数あった。

北海道大学の一般教育演習においては、理系学生が多数を占めることもあり、高校でのインプットが少ないと考えられる。「レポート作成のための基本的な日本語」については、意識化して学習することが必要である。特に、「文体」「接続詞」については、内容・方法を改善したうえで十分に学習することが望ましい。

また、構成についても、「構成を意識することにより楽に書けるようになった」というコメントが多数見られた。このことから、特に「問い（問題提起・目的の明示）」と「答え（結論）」および論拠の結びつきを意識化させることが重要であると言える。しかしながら、結論を導くために必要な論拠を適切に使うことについては、個人差が大きかった。論旨の組み立てをいかに行っていくかについては、今後の課題である。

なお、本演習を受講した留学生については、言葉の意味や使い分けに関する質問が日本人学生に比べて多かったが、作成した文章の質については差がないといってよい。むしろ、一部の日本人学生が構成・内容の点で劣ることもあった。問題は日本語を母語とするか否かではなく、母語に依存しない思考力によるものが大きいと思われる。

6.2 グループワーク

今回の実践では、構成の意識化や、内容を豊かにするため、自分の気づかない観点から「問い」「答え」

「論拠」を見いだすための方法として、特に後半でグループワークを多用した。

このグループワークについては、「知らない人と友達になれて楽しかった」などのコメントもある反面、「メンバーが変わるとやりにくい」などのコメントもあり、また、メンバーの関係によって、必ずしもグループが効果的に作用しなかった面もあった。

今後、グループワークをどのように行っていくについては、意識化を促し効果的な授業を行うという観点から検討を続ける必要がある。

7. おわりに

本実践では、留学生向けに開発した方法を応用して、日本人を主とする学部1年生に対して、「レポートの書き方」について授業を行った。

以上に述べてきたように、日本語母語話者であっても、非母語話者である留学生に対する日本語教育の方法が有効であるといえる。

しかしながら、その方法については、特に、論旨の展開の学習や、意識化を促すためのグループワークについて、課題が残った。

これらの課題は、日本人学生に特有の問題ではなく、留学生にも共通する問題である。今後は、留学生教育・日本人に対する全学教育の枠を越えて相互交流を行い、効果的な方法を検討していくことが、両者の教育をより充実させていくことになるだろう。

参考文献

- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997), 『大学生・留学生のための論文ワークブック』, くろしお出版
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子 (編) (2006), 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』, ひつじ書房
- 小林由子 (2000), 「意識的な書き手を育てる」, 日本教育心理学会第42回総会自主シンポジウム「教育心理学と日本語教育の接点」, 『日本教育心理学会第42回総会発表論文集』, S40-S41
- 小林由子 (2001), 「メタ認知を高め自律的な学習を

促すために：ライティングの実践から」，日本教育心理学会第 43 回総会自主シンポジウム「教育心理学と日本語教育の接点 2」，「日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集」，S40-S41

二通信子・佐藤不二子（2000），『留学生のための論理的な文章の書き方』，スリーエーネットワーク